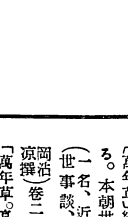
＊まんどころ　（最明寺殿）
〔政所〕鎌倉時代職制の一で、幕府の政務を總攝し、御家人の成敗財政に至るまで皆これを總べる政衙である。始はこれを公文所と稱したもので、長官を別當といひ、其他執事・寄人などがあつた。

まんねんぐさ　このお山の萬年草は人の命の生死を示し給ふと申すゆゑ。（萬年草）
〔萬年草〕紀州高野山などに自生する苔類である。本朝世事談綺（一名、近代世事談、菊岡沿）卷二に〔萬年草〕高野山の御廟にあり、一とせに一度日あつてこれを採ると云、此枯れたる草を水に浮めて他國の人の安否を見るに、存命なるは草水中に活きて生ひたるが如し、亡したるは枯葉そのまま也」。


〔さぐんねんま〕

まんねんごよみ　萬年暦・昔暦・新暦（大經師）
〔萬年暦〕一年限りでない暦で、人の運勢や方角の吉凶などをみる大雜書・三世明鑑の類をいふ。日本永代藏・卷五に、「萬年暦のあふも不思議あはぬもをかし」。

＊まんびやうゑん　早く寢せて疾く起し、晝あがかせたが萬病圓（鐘樫三）
〔萬病圓〕雍州府志・貞享三年刊）藥品部の中にも見えて、販路廣かつた萬病解毒圓をいふ。ここの文は萬病の藥といふ萬病圓といふ藥名にいひかけた洒落である。

＊まんま　引解きし鍵取出し、まんまと明けて鍵は元の紙入に初の如く納め置き（二枚繪）
「うまうま」（旨旨）の約訛。首尾能く。（小兒語に飯などをまんまといふも、うまうまの約訛である）。

＊まんろく　彌陀の六字の名號をマママママンマンまんろくにトトト唱へて死にたい（川中島）　まんろくといふ時は皆與兵衛めが惡いぞや（卯月紅葉）
〔まろく〕（圓また眞正）に擬音「ん」の增加した語。公平。完全。十分。現今も鳥取市地方の言葉に、十分または完全の意に「まんろく」といふ。耳興集に、「褒められんと思はば見物を忘れ、狂言を眞のやうまんろくに致したるがよし」。和訓栞に、「眞をまんとよぶも多し、まん中・まん圓・まんろくの類也」。

み

＊みあがり　今日は小女郎樣の母御の十三年忌追善の爲身あがりして（三世相）　一生身あがり仕暮しても、そなたのやうな意地腐に小判の槓杆でも動く女郎ぢやないぞや（藝門松）
〔身揚〕我が身を我が身を揚げる。「揚げる」は、（遊女を呼寄せて遊ぶ意）義。遊女が勤を休むことをいふ。身揚りすればその日の揚錢を見積つて抱主への借金の中に加算されるのである。人倫訓蒙圖彙・七に、「傾城のならひにて勤の内に身あがりすれば、その揚錢覇方への借金とつもり、年季あきて此かねを立てねばいださぬなり」。野傾友三味線・寶永五年刊）卷之五、堀江屋の枝川といふ遊女の詞に、「我身を我と買ひたる身あがり代云云」。傾城禁短氣（寶永八年刊）に、「身あがりとやら云うて、我體を我金出して買はるるやうなむさい意氣は云云」。

＊みあれ　正八幡大菩薩筑紫にみあれの折柄も石上樹下の吉例あり（女夫廼）　みあれの注連に引く鈴の、叶はずばよも鳴らしとの、頼みを賀茂の瑞垣に、玉依姫のその昔、別雷の御神を、御產の紐のやすらかに（女夫廼）
「御生」または「御形」のことである。河海抄に、「賀茂祭前日於三垂迹石上一有三神事一號二御形一」。花鳥餘情に、「みあれは玉依姫の別號を生み給ひし所をいふにや、さて御生とも書く、卽ちかたちをあらはし給へる故に御形とも書けり」。

＊みうけ　餘所へ預けて置いた金、身請の爲に取戻した（冥途飛脚）　身請の衆は親方が濟んでから、宿老殿で判を消し、月行事から札取られば大門が出られませぬ（冥途飛脚）
〔身請〕遊女などの身の代金を拂うて其の商賣から退かすこと。請出。落籍。身請門出には遊女の身の代金を拂うて、親方が濟んでから宿老で判を消し、月行事から札を取つて、自由の身となつて大門を出るのである。そして其際は相應の內祝も行つたものである。巢林子の作中、身請門出祝を書いたものに、その派手なのは淀鯉出世瀧徳上卷に淀屋勝二郎が太夫吾妻を請出す條、藝門松・下卷に雛與平が太夫吾妻を請出す條、博多小女郎波枕・上卷に毛剃九右衞門が數多の遊女を請出す條などがあり、またその哀れなのには冥途の飛脚・中卷に忠兵衞が梅川を請出す條などがある。これらで略推察できるが、なほ巢林子よりも後の撰述の澤標（寶曆七年刊）に、「身請門出〃身請定まり門出の日、揚屋茶屋親方の親類知音の銘々（梅香、或は絹織物等相添へ祝儀となす、又もらひたる方よりもそれぞれの屆事は、其後門出名殘として家內一門一家寄集り、料理に結構を盡し、盃事ありて揚屋より迎に來る、乘物持たせ來るもあり、かるきは竹輿、被（かづき）菅笠さまざまあり、夫より揚屋にて又盃事あり、此時なじみの女郎達思ひ思ひ寄集り、見送の事どもあり、門まで賑々しく見送り、はなやかなりし事どもいふ斗なし、この儀式は大盡の威勢次第にて華美かぎりなし」、とあるも參考とならう。

みえいだう　地名部「みえいだう」を見よ。

見えいろ　「いろ」を見よ。

見がい　「がい」を見よ。

＊みかうし　舞樂があるからはまだみかうしではない、內へはどれから入ることぞ（聖德太子）　主殿司の宿直守御格子參る（酒呑童子）
〔御格子〕御格子をおろして御寢なる義。御寢。格子は細く木を削つて、碁盤の目の如く組んで黑く塗り、裏に板を張つて上下にあげおろすやうにしたものである。伊勢貞丈は、格子は板なく、蔀は板を張つてあるやうに云へども、松岡行義の後松日記には誤れるを糺じてある。「御格子參る」は、御格子を下すをいふ。

みがち　時景もとより身がち者、北の方にさしこまれ（天鼓）
〔身勝〕身勝手。利己心强きこと。

みかはもの　これへ見えた飛脚の足本のねばいは三河者に極つたぞ（丹波與作）
「あしもとのねばい」を見よ。

みきね 丸木柱に萱の屋根、供物はみきれ、宜禰が神樂を參らする（烏帽子折）

〔三枠〕神道類聚名目抄に、伊勢神宮の御贄に炊ぐ米は蒼くこと三枠で、黑米の如しである と見え、盥尻卷七に、伊勢神宮に奉る黑米の神供は饌を昭にし給ふことなりと見えてゐる。

みきはまさり 猪熊は軍介にみきはまさりの大男（稱田川）

〔汀優〕みぎはたつ（水際立）と同じ。目立つて勝れること。曾我物語・卷一、奥野角觝の條に、「角力は力によらず、手だに優ればみぎは優りの相手をも打つものを」。

***みぎり** 賢王のみぎりには松にも、花の咲くべき事、この須磨の浦曲に帝王もましまさず、松に花咲けるは、この波の底は龍宮にして、龍王のみぎり疑ひなし（松風）

〔砌〕水限の義。雨滴を受ける軒下などの敷石をいひ、轉じて折。頃。場。居る所。

みぎん 「あいみんじきんのみぎん」を見よ。

***みぐし** 忽ち光明赫奕として千手觀音の御ぐしと變じ給ひけり（田世景清）一萬座の護摩を焚かせ御ぐしを繼ぎ奉れ（田世景清）

御首。御髪。神代紀に首又は髮を「ぐし」と訓み、奇で、美めう語であるといふ。

みくにのまち 貫之が古今集・三國の町といへるも其時の遊女なりしぞや（三世相）江口の白女、三國のまちといひし女郎は延喜帝に請出され、歌は古今に入りしぞや（加增曾我）

〔三國町〕三國は氏、町は名、貞朝臣登の母で仁明天皇の更衣である。この人の詠は古今和歌集・卷三、夏の部に、「やよやまて山時鳥言づてむ、われ世の中に住みわびぬとよ」と見えてゐる。往時越前國三國の町は繁華で遊女町があつた故に、それに通はせて如何にも傾城の名らしう見せた洒落輕妙な筆である。さて三國の町が繁華で遊女町があつたことは、傾城反魂香（巢林子作）にみやといふ女の幽靈の言葉に、「三國では勝山」とありて、みやが三國町で勝山と名乘つて遊女を勸めたを見ても推察される。

御車の五緒 「車の五緒」を見よ。

***みこ** これ程醫者の出入やらみこの御符のと屋内が持てかや（夕霧）

神子の義、巫女をいふ。「黑格子」を見よ。

***みこしにぶだう** 二王のやうなる法師武者、人か見越入道か（孕常盤）若き女郎禿ども、見こし入道高入道、（和漢三才圖會所載）

〔見越入道〕

みこしのえだ ここな人。木の名は檜葉・後に見えるは見越の枝といふ物（聖德太子）

〔見越枝〕立花法式の語。立花時勢粧・八に、「立花祕傳抄之五、見越は心かくしの後より木高く立のぼせて調の方へなびかす、見越は心の後を守て心の勢を强くなす物也、後へ出づる物是より長きはあるべからず」。

みさきばらひ お十二燈が一包、御さきばらひが百二十、お望次第といひければ（卯月淵色）千早振みさきばらひの道清め、天清淨とは水火の清め、地清淨とは屋内の清め（卯月淵色）

〔御先祓〕神靈の降臨する御先を祓ひ清める義、神降しの祈禱をいふ。ここの文に百二十とあるは、神降しの祈禱の禮錢百二十文なるをいひ、「天清淨云云」とあるは卽ち御先祓の祈文で、謠曲・葵上に「天清淨地清淨、內外清淨六根清淨」、とあるに據つたものなるべく、なほこの神降しの祈禱の文に就いては、謠曲・葵上の條巫子の招魂の文に據つたものと思はれる所が多い。

みさんばい 「さんばい」を見よ。

***みじまひ** 身しまひして百島が膝元へつつとより（用明天皇）さあ身仕舞して早う行きや（重井筒）

〔身仕舞〕身仕度。身繕ひ。

みしやり 忠信殿にも自らにもみしやりぞ不埒な事はなし（吉野忠信）

〔身舍利〕舍利は梵語 Sarira. 骨身と譯す。「身舍利」の舍利は「甲が舍利になる」などいふ舍利と同じ語である。僞るに於ては神佛の罰によつて身が舍利になることもあるの意で、自誓の詞として用ゐる。當世大和言葉（著者及刊年未詳、但し挿畫等より推測して慶安より寛文頃までの間の製述であらう）に、「人と雜談しける時、かりそめごとにも佛祖天道神八幡氏神照覽、ゐずくみ、みしやり、此火に茶毘せられうぞなど、恐しき誓言すること甚だよからぬ事といへり」。なほ當時行はれた自誓の詞については「けいせいみやうが」の條を見よ。

みしりこじ これ業平殿、見知りごしとな思されそ、綸言なれば見遁しにはなり申さぬ（松風）

〔見知越〕かねての知り合ひ。面識。

***みしん** 横田村の父様二石二斗の未進に詰り六十六で水牢（丹波與作）私が親の未進米この六日の吉書に立てればもとの水牢（丹波與作）

〔未進〕御領の貢米未納をいふ。黑川道祐撰・日次紀事、十月の條に、「一年之貢米悉收納謂二皆濟一、倭俗每二物價之無二遺失一謂二濟、不二皆濟一曰二未進一」。

みすやぱり 絲もて通すみすや針（用明天皇）京羽二重の御所染、みすや針手縫箔（浦島）

〔簾屋針〕京都簾屋で賣つた穴四大で絲の通り易い縫針であつて、京都名物の一。雍州府志（延寶年）七、土產門下・服器部に、「鍼。近世三條通河原町東、翠簾屋之所賣、是謂ゝ堺、用夏喪共求ゝ之」。

***みせざし** うかうか話してあれ店ざし時（女腹切）店ざし身皿とやかくと（生玉）

〔店鎖〕夜に入つて店に戸を鎖す時。「店ざし身」は「店ざし」に「指身」をいひかけたのである。

みせぢよらう 梅鼎しく松高き、位はよしや引締めて、哀れ深きは見世女郎（冥途飛脚）天神太夫の身でもなし、さもしい金に氣が觸れた見世女郎の淺ましさと（冥途飛脚）

〔見世女郎〕太夫、天神、鹿藏といふ遊女よりも以下に位し、店頭の格子內に出張して客を招く遊女で、これを端女郎（はしぢよらう）（端を見よ）ともいふ。

御前義經記（正德二年刊、大阪）巻一、愼城の因緣の條に、「端女郎は鹿嶽より下、みせ女郎をいふなり」。（「かうし」の條の畫をも見よ）。

みそかすばうず 四十ばかりのみそかす坊主（娘）

〔味噌糟坊主〕味噌摘坊主など云ふと同義。僧を罵る詞。

みそぎ 赤栴檀のみそぎにて五寸の釋迦の尊像玉の中にましまし（大織冠）

〔御衣木〕神佛の像を刻む木をいふ。新古今集・卷十九、神祇歌の部に、「千早振かしひの宮のあや杉は、神のみそぎに立てるなりけり」。

みぞはぎ 盆には我も新精靈、親子の盃薄萩の、露の手向と引かへて（氷朔日）

〔薄萩〕草の名。中國地方で俗に盆花といふ。萩の一種で、莖の高さ二三尺以上も成長し、水邊濕地に生じ、盂蘭盆の頃紅紫色の小花群りて穂狀に排列す。盂蘭盆には折取って佛壇に挿し墓前に手向ける。

〔ぎはぞみ〕

***彌陀** 彌陀賴む、人は雨夜の星なれや、雲晴れれども西・西へこそ行け（賀古教信）一丁を二十四に切り、二丁で四十八串彌陀の誓願、アア何處ぞに彌陀の光はせぬかい（孕常盤）心には彌陀の名號一筋の、紙鳶の絲よりなほ細く（氷朔日）阿字の一刀彌陀の利劍を以て煩惱のきづなと觀念せよと（夕霧）彌陀の六字の名號（川中島）

「阿彌陀」の略稱である。梵語 Amitayus（無量壽と譯す）と梵語 Amitabha（無碍光と譯す）とを合して Amita と通稱するのである。眞宗・淨土宗などはこの佛を本尊として尊崇する。賀古教信七墓廻のここの文は謠曲・百萬に據ったのである。「人は雨夜の星なれや云云」を見よ。「彌陀の誓願は彌陀慈悲の誓願四十八のことである。「四十八枚彌陀の願」を見よ。「彌陀の名號」は彌陀の六字の名號、即ち南無阿彌陀佛をいふ。「彌陀の利劍」は「りけんそくぜ」を見よ。

身だ 身だまんじりともせない（多博）

「身どもは」の意にいふ長崎國訛。

***みだいどころ** 御臺所の姫君のやうに（大經師）

〔御臺所〕貴人の內室の敬稱。御臺所は御臺盤所といふを略した語である。內室は臺盤所で食物の世話する意より稱した語である。

みだくわんぜい みだくわんぜいの像を懸け（大原問答）

〔彌陀觀勢〕阿彌陀如來と其左右に侍せる觀音・勢至とをいふ。

***みだけ** 此血を染めし指貫なりと思へば心みだけ絲（薩摩歌）むすぼれてなまなかつらきみだけ苧の、おさん・茂兵衛は夢にだに戀せぬ中の戀となり（大經師）

「みだれ」（亂）の轉語である。「みだけ絲」は亂れ絲、「みだけそ」は亂れ苧である。談林十百韻（延寶四年刊）に、「そこのきたまへみだけ鏡あり」とある。「みだけ鏡」も、緒にさしてないばら鏡の意。但言集覽に、「みだけ。ミダケ鏡、ミダケ樂など云、亂也、ケとレと通ず、毫ボレをボケ、蠶ニレをニケ是也」。

みちひのたま 住吉の神楫を取り、龍女はみちひの珠を捧げ（艶容）

〔滿干珠〕「潮干珠」、「潮滿珠」を見よ。

みちもせに いまはしやとて道もせに曝す體を道者にも嫌ひ憎まれ（丹波與作）

道も狹に、即ち道も狹きまでにの義。但しここは道面の意に用ゐたのである。千載集・春下部の歌に、「吹く風をなこその關と思へども、道もせに散る山櫻かな」。

***みつ** ひとかに釋尊御一代の經文を披き、つらつら出離の樣を案ずるに、顯につけ密につけ其悟たやすからず（大原問答）

〔密〕眞言をいふ。宋高僧傳に、「密教者伽瑜羅頂五部護摩三密曼努羅法也、以三金剛智一爲二始祖一」。

みづあげ かぶろが渚の活花の、水あげそめし其日より勤の露に開き初め（本領曾我）長門樣の才覺にて此度の水揚とやらいふ事をかの吉樣をお賴み故、私に帶も解かせずお主の問をかへ、床の側へも寄付かぬやうになされし故（酒呑童子）

〔水揚〕秀（その條が新造（を見よ）となるその夜客を取って同衾すること、即ち妓女の初床をいふ。並木舍五瓶撰・俳諧通言、言語の部に、「拡攪」。新造をしたてるに馴染の客にたのむ初床をいふ。松屋筆記・卷九十七に、「水揚。倡家にて倡女を船にたとへて云ふ詞なり、小女を新造といふは船の新造より云へり、始めて聞中を試るを水揚と云へり、船に積たる物をおろすを水揚といへば、はじめて客にあはしめてその金銀を得るを船荷をたとへて云へるなり云云」。本領曾我のこの文は、生花の切口から水を吸上げることを水揚といへば、それをもいひかけたのである。

みづいはひ

〔水祝〕「石清水浴びせません」を見よ。

***みづうろこ** 今の世までも三鱗、北條一家の紋なりとは此時よりのためしなり（伊豆日記）

〔三鱗〕北條氏の紋である。「うろこがた」を見よ。

みつがしら 新田は馬上の名人にて、樂天が三つ頭・王良が祕密の鞭、尾筒を手綱にしつかととり（百日曾我）

「さんづ」を三頭と書けば、その訓證であらう。「さんづ」「樂天が三つ頭云々」を見よ。

みつがなわ さあ讓狀が物を言ふ、三つ鐵輪で讀んで見よと（卯月紅葉）

親且那と三つがなわでけんほくば晴れて產んで見しよ（酒呑童子）

〔三鐵輪〕三人が三本足の鐵輪の形に並び坐すること。鼎坐。傾性野群談（享保二年刊）三之卷、飛行の魂は日本傾國の條に、「この太鼓黑主の茂七が一座したとの證據人、うそとは言はせぬ三つ鐵輪で吟味いたさうと、むづかしういひかかる」。

みづぐき 今更濡す水莖の、露御手には觸れまじと、推量りまゐらせ候へども（吉野忠信）

〔水莖〕筆または筆跡をいふ。玉かつま・一の卷に、「消息書をみづぐきといふは、玉づさといふと同じくて、これもみづみづしき木といふことなり、そはまづ上古には、人の許へ使をやるには、梓木に玉をつけたるを持せて、使のしるしとせしなり、玉梓の使とつねにいふは

此事なり、それより移りて、酒息文をも同じく玉梓といひ、又かの玉つけたる梓をさして、みづみづしき木といふ意にてみづヶきといへるより、これもうつりて書をもしかいへるなり、かくて又うつりては、必らずしも人の許へやる書ならでも、手跡の事をも水ぐきといふこととなれるなり」。巣林子のこの文は、筆跡を水莖といひ、みづみづしい莖にきかせて露にいひつづけた。

みづくさい 必ず必ず物言ふな見ぬ顔せい、かう言へばつれない水臭いやうなれど（大經師）

〔水臭〕情愛薄い。隔心がある。和訓栞に、「みづくさし。俗語に淡しき道にいへり、水臭き義味より氣象に轉じいふは戯らしきの反也」。

みづぐし ひくや夕なのすき櫛や、亂れ鬢櫛人はよも、みづ櫛とこそ思ひしに、たが三つ櫛に名を立てて（用明天皇）

〔三櫛〕梳櫛・鬢櫛・水櫛をいふ。この文は「誰が見つ」を「三櫛」にいひかけたといふまでもない。

みづぐし 亂れ鬢櫛人はよも、みづ櫛とこそ思ひしに（用明天皇）

〔水櫛〕水に浸して使ふ齒の疎なる櫛、即ち荒櫛をいひ、黄楊などで造る。この文は「人はよも見ず」を「水櫛」にいひかけたのである。

みつぐそく 誠の眞の臺子とはこの行幸の臺子の圖、三幅對・三つ具足・壺飾りの品品（鑑權三）

〔三具足〕香爐・燭臺・花瓶の一揃をいふ。雍州府志・七・佛具の條に、「凡所供佛之花瓶・香爐・銅燈臺、倭俗是稱三具足」三物具足之謂也」。

***みつくみ** 水汲みが汲んで荷うて持つや桶の棒（今宮）

〔水汲〕當時は水を桶に汲入れて、一荷を三文乃至十文程に大阪市中を賣歩いた者があつた、それをいうたのである。商人職人盡日記（正德三年刊、大四之卷）に、「流れ行く水を汲みて口すぎにあまる、清側の家へも三文、それより内へ入れては四五文、七八文十文にも壹荷を賣ふ云云」。

***みづこ** 女房柳歌君みづ子を肌に抱きながら（國性爺）辛しと思ふ胎内の、水子故にうき目に遭ひ（孕常盤）

〔水兒〕「みづ」は弱き意。赤子。嬰兒。胎兒。

みつごんけざう 白雲變じて密嚴華藏、大覺圓明の佛體と現はれ（蟋蟀天皇）

〔密嚴華藏〕密嚴國と華藏國である。密嚴國は密嚴經に說けるところで密教に屬し、華嚴國は華嚴經に說けるところで顯教に屬す、共に他受用報土で淨土である。

***みづさかづき** 親子夫婦が水杯、さいつさされつ、汲めども盡きず、飲めども醉はぬ水酒盛（宵庚申）

〔水杯〕水酒盛ともいひ、再會期し難い訣別の時に、肉親の者相寄り酒の代りに水を酌み交すこと。蓋し死別をかねる意で、禮記・喪大記に「疏食水飲」とある故事に據つた風習であらう。心中宵庚申のここの文は、島田平右衛門と千代・半兵衛との親子夫婦の生別は、やがて死別となる伏線である。

***みづし** 下の水仕に追下し十六箇所の釜を焚き（小栗判官）如何なるみづし下女はした身を、鍋釜に相住みしても（松風）

〔御厨子〕御厨子所の女。下女。水仕と書くは當字。落窪物語に、「御手水かゆいかでまゐらむと思ひて、みづしにや語らはましと思へど」

みづせがき 流れ寄邊の水施餓鬼（薩摩歌）三七日には龍女成佛水施餓鬼（蟬丸）

〔水施餓鬼〕「ながれくわんちやう」を見よ。

***みつせがは** この清水をば三瀨川、あふせを急ぎ候ぞ（蟬丸）

〔三瀨川〕葬頭川に三つの渡場がある、よつて三瀨川ともいふ。さんづのかは『だつえば』を見よ。蜻蛉日記に、「みつせ川淺さの程も知られじと、思ひし我やまづ渡りなむ」と見えたれば、この語も古くからいはれたものである。

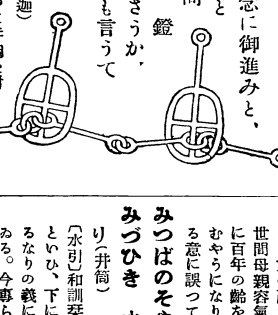
みつぢ （酒呑童子）

〔三地〕謠曲で小鼓の囃に三つ地といふがある。謠方でも三つ地には三つ地に相當するやう謠ふのである。

***みつちや** 色は眞黑に横肥つたるみつちやづら（淀鯉）

「やみらみつちやのかはぐろ」を見よ。

みづつき 初一念に御進みと、轡の承鞚えいと摑んで、四五間引いて（振袖始）



鐙にかけて蹴散さうか、ぐつとなりとも言うて見よと、乘出す轡の水付しつかと取り（釋迦）

〔承鞚〕轡の端にあつて手綱を附ける金具。水付と書くは借字である。和名抄に「承鞚、美豆岐、俗云三都都岐」。貞丈雜記・卷十三、馬具部に「みづつきはひつ手のこと、手綱を付るかね也」。

三つづつ十と三つの里 難波津や三つづつ十と三つの里（曾根崎）

三十三所觀音堂のあるを三津の里にいひかけたのである。三津の里は即ち高津、敷津、難波津のことで大阪である。地名部「大阪三十三所」を見よ。

***みつはぐむ** 七十有餘の老女、頭の雲もみつはぐむ老いさらばひて出でてける（蟬丸）齡をのべて海老の腰、みつはぐむまで萬代の、龜の甲なる松竹の（天智天皇）

「みつは」は稚齒、「ぐむ」は萌む義。老人が上下の齒皆落ちた後、更に稚齒萌むをいふ。既齒の生じるまでに老いたるをいふ。源氏物語・夕顔の卷に、「惟光が父の朝臣の乳母に侍りし者の、みつはぐみて住み侍るなり」。後撰集・卷十七、雜部の歌に、「年ふれば我黑髮も白川の、みつはぐむまで老いにけるかな」。好色一代女に、「女の鶴たけてみつはぐみ髮は霜を梳り」。世間母親容氣（寶曆二年刊）卷之一に、「今の間に百年の齡を經て、家に歸らば腰もみつはぐむやうになり」とあるより見れば、腰の屈まる意に誤つて用ゐたものである。

みつばのそや 「そや」を見よ。

みづひき 水引は神明佛陀の斗帳なり（井筒）

〔水引〕和訓栞に、「みづひき。上に張るを帽額といひ、下に張るを水引といへり、水を引廻たるなりの義にや、幔なりといへり」と見えたる。今專ら芝居の舞臺の上方、又は相撲の土俵の周圍の上に張る細長き幕の稱。

みづぶき （宵庚申）

〔水蕗〕水草の名。一名鬼蓮ともいひ、葉は圓形で花鏃は帶紫色である、地下莖、嫩き莖柄、種子は食用となる。

みつめがかり 碁盤引寄せ片手ざし、三つ目懸りの大指ひしぎ、腕先試し居たりしが（碁盤太平記）
〔三目懸〕この文は、碁盤を片手に攫んで差上げるに、大指（拇）が碁盤の三つ目に懸る大なる指をいうたのである。碁盤は木の厚さ三寸四分、一目の分七分程だといふから、三つ目懸りになるには餘程の大きな指であらねばならぬ。

三つ山の爭 「中の大兄の御歌」を見よ。

***みづらう** 横田村のとつ様二石二斗の未進につまり六十六で水牢先、打拂ひ切拂ひ水牢に入ること十三度（持統天皇）
〔水牢〕河水の中に牢獄を構へ、年貢を滯納する者を入れて水責にする刑罰である。西鶴撰・諸国ばなし（貞享四年刊）に、「伊賀國久村の右衛門太郎とて田畠五町作徳大分なりしも、皆濟時には横に曳て幾度か水牢に打込まれ、未進首丈にぬ驚かず」。黒川道祐・日次紀事（延寶年中成）十月の條に、「一年之貢米悉收納謂二皆濟一、倭俗每物僅之無二遺失一謂二濟、不二皆濟一曰二未進一、責二其未進之米穀一是謂二催促一、其者執二其人入二獄舍一、又河水中構レ獄使下二其人一入上之、是謂二水籠一、倭俗獄舍謂二籠一。

みつわぐむ 「みつはぐむ」を見よ。

みづをくれる こりや造手め、重ねての詮議には水をくれる、用心せよと（反魂香）
歌升の水を呑ませ、またこれを噴かせて、水責にして拷問するをいふ。碧山日録・寛正二年三月二十八日の條に、「獄官多賀某決二南禪二囚僧之罪一、以二歌升水一、其口噴レ之呑レ之、其苦萬端云云」。

***みてぐら** （三國志）
「みたむけぐら」（細手向座）の約であるといふ。座は置座の義。神に奉る物の總稱。ぬさ。倭名抄に「帛」をよみ、萬葉集に「帛」をよんである。

みなくちどぢやう 一口二口みな口どぢやう躍越え（丹波與作）
〔水口泥鰌〕近江國甲賀郡水口は泥鰌の名産地である。好色堪忍破袋（寶永八年刊）卷一に、「みな口口に名物の鯉・鰌・汁もと呼ぶ茶屋に、腰打掛けて一休み云云」と見えてゐる。みな口口とあるは、皆口口に水口をいひかけたのである。

***みなつき** （兼好）
〔水無月〕炎暑烈しくて田の面に水の無くなる月の義。陰暦六月の異稱。

みなれざを 潮滿ち來れば水馴棹、長き月影もほの曇り（薩摩歌）
〔水馴棹〕水に馴れた棹の義。水棹。

みのて 太鼓・鉦をみのてに立て、虎を入鹿にけしかくる（大織冠）敵をみの手に引受け、先を廻して切りちらせ（今川了俊）
〔箕手〕箕のやうに左右に張つた形をいふ。俚言集覽に、「箕の手。凡て左右に張たる形を云」

三原 衣類の外は三原の合口・時代の印籠（今宮）
備後國三原の刀匠に名高かつた者が八名あつた。「三原の合口」とは、その始祖正家作の匕首をいうたのである。

三原十太夫 敵は三原十太夫、序にて作りし惡心の、切で報の來る時は、猪喰屋橋思出す（今宮）

みふしたゆ あの風は必ず器量自慢して根性が惡いもの、この横笛はみふしたえ嫉ぢや嫉ぢやとありければ（娥）　この横笛は身ふしたえ嫉ぢや嫉ぢやがなほ嫉ぢや（娥）
〔身節絶〕身の關節が絶え離れるやうな氣がしてじつと保へられぬをいふ。森田吟夕撰・宇津山小蝶物語（寶永三年刊）卷六、而後に又持て參り候の條に、「手を取つてねよかといへば、黙頭給ふふりあひのしをらしさ、金輪際身節はなるるやうにて少し酒氣はあり、ばたばたといふも心やすくしかりまはして、扇の芝（淨瑠璃）に「男盛りの又太郎、東に見馴れぬ御所女見るに身節もたよたよと、何の事も思はれず」。

***みまかる** 淨瑠璃五歳の秋の頃長者殿には身まかり給ふ（十二段）
〔身罷〕死去するをいふ。和訓栞に、「みまかろ。死去をいふ、身罷る義、萬事罷去の意なるべし」。

見まつべる 「まつべる」を見よ。

***みまふ** はて拠見まうた事をいふ人かな、この未長き大河の川下に、人がなあらうとて、御免を請うて渡る者のあるべきか（大磯虎）
〔見舞〕見廻る。巡視する。ここの文は、はて拠この大河を巡視した如き事をいふ人であるわいの意。

***みみこすり** 某一人の不調法、切腹と覺悟致せし所に、何とやらん見苦しき耳こすり、瀧口も耳あればよつほどあたつて聞にくし（娥）
〔耳擦・耳きり〕。當擦。あてこすること。

***みめ** 客を倒すがみめでは無い、商賣せいでも大事ない（二枚繪）　結構なばかりみめではない、男の性の惡いは皆女房の油斷から（天網島）
〔見目〕東鑑に眉目をよんである。面目。ほまれ。

***みやうが** これで結句嘉平次が親の冥加も盡きるわいの（生玉）
〔冥加〕吾人の眼には見えねども、神佛などの常に吾人を照覽し給うて加護を被り居る事。この冥加といふ語をその人の職業身分などの下に附けて自謙の詞として用ゐる。「けいせいみやうが」を見よ。心中二枚繪草紙に、「講中御茶所の冥加錢」とあるは「ちやしよ」を見よ。

***みやうがう** 難波の祖師の名號（三世相）
〔名號〕彌陀、文殊、普賢など皆これ佛菩薩の名號である。されども單に名號といふ時は彌陀の名號、卽ち南無阿彌陀佛の六字名號をいふ。「難波の祖師の名號」とは、大谷派本願寺別院（難波御堂、裏御堂・または南御堂といふ）を創立した教祖教如上人眞筆の名號をいふ。

***みやうじやう** 月は白みてあかつきの、あれ明星もさしのぼる（二枚繪）
〔明星〕金星をいふ。日沒後他星よりも赤く輝く、これを宵の明星といひ、日出前他星よりも光輝大である、これを曉の明星といふ。丹波與作に「明星が茶屋」とあるは地名部についても見よ。

＊みやうぶ 内侍命婦のおもとびと（艶狩）さては伯父御の惡心にて鼓を取らん爲なりしを、みやうぶの御告ならずんば只うかうかと渡しやせん（天鼓）

〔命婦〕後宮女官の位である。周禮・天官の注に、「内命婦、謂二九嬪世婦女御一、外命婦、謂二卿大夫妻一」、春官の注に、「命有二爵命之義一」とあるによつて、大寶令に、五位以上を帶してゐる婦人を内命婦とし、五位以下を帶してゐる婦人を外命婦としてゐる。それより轉じて後には中臈の女房を命婦と稱してゐる。又狐神を命婦といふ。天鼓にいへる「みやうぶ」は狐神をいうたのである。蓋し狐が美女に化けるといふ白居易の詩などあるよりして、狐を女神とし女官に准じて命婦といつたのである。塵囊抄・一に、「狐を命婦の御前といふは何事ぞ、……狐を祝ふ社女神にてましませば、女官に準じて命婦といふ、呉音にミヤウブと申せるにや、又元來其名ある神の使者なれば云歟、人に可被尋也」。

＊みやうもん 筆持ちながらおほあくび、名聞はなれて住みなせり（乘好）

〔名聞〕名の世上に聞えること。ほまれ。この語浄瑠璃にも見えてゐる。

＊みやうり 男冥利・商冥利虚言ござらぬ（蓍門松）

〔冥利〕吾人の眼には見えねども、神佛などの常に吾人を照覽し給うて利益を被り居ることの義。よつて罪業を敢てするに於ては冥利につきる意よりして、自誓の詞に用ゐる。「傾城冥加」の條を見よ。

脈論 脈論・運氣論（源氏浴泉節）

漢方の醫書である。曲瀬道三撰述のものにこの書名のものがある。また脈論口訣は天和三年の刊で五卷ある。

＊みやこづめ 座敷牢へ入らうが都詰にならうが（蓍門松）

〔都詰〕玉將を盤面の中央で詰めること。ここの文は將棋上の語をいひかけて文を飾つたのである。

＊みやすどころ 今度親王御運をひらき二度都へ入り給ふによつて、姫君の御事御息所に差上げ給はば（用明天皇）

〔御息所〕「みやすむどころ」の略。女御、更衣、寵幸される後宮、及び東宮妃を申した。もと主上の御休息し給ふ便殿の名なるが、その所に伺候する故に名稱となつたのである。

宮の前大根 稼ぐ體をば親兄に、これ宮の前大根を擔うて家路に戻りける（二枚繪）

細根の大根である。井辰西鶴撰・俗つれづれに、「この樽にて天滿宮の前の大根を細漬にして送りたらば、名物にて珍しきものを」。物類稱呼・三之卷に、「大阪天滿にてほそね大根といふ、又宮の前の大根といふ。河州守口にて是を以て粕漬とす」。巢林子のこの文は、「これ見よ」を「宮の前」にいひかけたのである。

みよしげた 土産に大阪のみよしげた頼むぞや（博多）

當時三吉下駄といへば、上方で流行の下駄であつたのであらう。但大阪に三吉といふ下駄屋があつたものか、また如何なる形の下駄か知り得ないのは殘念である。

みるくひ 寢もせで一人赤螺の、誰を待てとや人のみるくひ忘貝（國性爺）

〔海松食〕貝の名。蛤に似て長さ三寸許、暗褐色の殼に海松が多く附著してゐる。

みるちや これへは入婿、乳呑ごもんを持ちながら人のみるちやも構ふにこそ（重井筒）

〔海松茶〕海松色（緑に黒み）があれる茶色をいふ。海松茶染は元祿頃に流行した染色であつて、傾城色三味線・元祿十四年刊）に、「しかし素海松茶は今時世間にはやり過ぎて、我らやうな幇仲間の目にしみます」。（日本永代藏・卷二、世界の借屋大將の條に、「一生のうちに絹物とては紬の花色、一つは海松茶染にせしこと、若い時の無分別と二十年もこれを悔しく思ひぬ」と見えてゐる。彼約ひとむきの藤一も海松茶染の流行に誘はれて染めたものの、染めかへしのきかぬので悔んだのである）。巢林子のこの文に「乳呑ごもん」とあるは「乳呑子」に「小紋」をいひかけたのである。

みるふさ 氷の剃刀取出し、みるふさの黒髪を愛想もなく引上げて既に切らんとし給ふ時（小栗判官）

〔海松纒〕海松の枝葉のふさ〳〵としたやうに、髪のふさやかなるをいふ。

みわのさうめん 吉野の花も振り捨つる、三輪の素麺食付きて（淀鯉）

〔三輪素麺〕大和國三輪より産出する素麺をいひ、この地の名産である。萬金産業袋・六、酒食門・素麺の部に、「和州三輪は昔よりも素麺の名物、誰人の口ずさみにか、そのみわげのこりし神のすぎむらに、今もかかるやそうめんの絲ともいへり、平そうめん・常そうめんいづる」。（序云、「そうめん」（素麺）は「さうめん」（索麺）と書くを正しとす）。

身を打つ 命惜しい程なら高で身をうつこともない（生玉） 戀に身をうつこともない（女腹切） あの平兵衛めは是の見世を任せる程の久しい者、なんぼうでも身をうつて仕損ふ者でない（氷朔日）

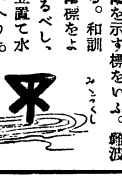
身を打「うつ」滅す義。落魄するをいふ。「うつ」を見よ。近代長者鑑（元德四年刊）卷之二に、「色ぐるひする身は誰とても同じこと、今日あつて明日をもはかり難し、身を打ち給ひしは覺悟の前にてあるべけれども」。役者稽古三味線（寶永五年刊）坂田藤十郎の條に、「傾城買の身を打つことばかりせらるる」。

＊身を知る雨 委しき事をも知らずして、一人悲しむ身を知る雨の、晴れぬ思ひや慰むと（凱陣八島） 男も心かき曇り、空は今年の日照にも、袖には誰か雨乞の、身を知る雨ぞ果しなき（鑓權三）

思ひある身を知りて折からに降る雨の義。涙をいふ。古今集・戀歌四の部の歌に、「かずかずに思ひ思はず問ひ難み、身を知る雨は降りぞ增れる」。新板女重寶記（元祿十五年刊）五之卷、新やまとことばの條に、「身をしるあめ。なみだをいふ也。

みをつくし 野中の案山子みをつくしも一人は立たぬ世の中ぞ（津戸三郎） 身をつくし難波に咲くやこの花の（冥途飛脚）

〔澪標〕澪つ串の義。澪を示す標をいふ。難波の枕詞としても用ゐる。和訓栞に、「みをつくし。澪標をよめり、水脈の籤の義なるべし、尺寸を記したる木を立置て水の淺深を量る物也といへり」。



みんづり 若みんづりの井筒屋と、わきて賑賑はへり（蓍門松）

若やぎてうるほへる樣にいふ。みづみづしいさま。百俵談に、「水通り、きようにうるほひたるさまを云」。紅梅千句に、「みんづりと見ゆる

若木やはたち花」。兩吟一日千句に、「長煩ひや養老の瀧、みんつりと叶はぬ繼が叶ひきて、揚屋のたいこもちまる長者」。「わかみんづり」を見よ。

む

むいうじゅ 色香すぐれて咲きたるは無憂樹といふ木にて、文字には憂無しと書く(釋迦)

〔無憂樹〕梵語・阿輸迦(あしゅか) Asoka. の譯名。釋尊はこの樹下に生れられたのである。「翻梵語・卷九に、「阿叔迦樹(應)云二阿輸迦一。譯曰二無憂一」。因果經に、「二月八日夫人摩耶)往二藍毗尼園一、見二無憂華一、攀二右手一摘、從二右脇一出」。

むいかだれ 六日だれの忌明の誕生日の食初のと、取つて取つて取上婆(たば)同前(嵯峨天皇)

〔六日垂〕「むいか」は「むゆか」の轉。孺寵自語六に、「産婦の七夜の六日めを六日たれといふは、出生の小兒のうぶかみを六日めに剃りしよりのことなるべし、髪をそるといふを忌みて髪垂といへりしより、六日髪垂を略して六日垂と稱せしなり」。晉信錄に、出産六日に初めて名を呼ぶ、六日だれといふ、平産の披露に知音の方に餅を配る、男子は三つ、女子は二つなる由見えてゐる。

***むいき** 短氣の犬死、無意氣に事を仕損ぜしといはれうが腹が立つ(持統天皇) あまり無意氣な御勘當、つらい親御の心や(持統天皇) どうでもかうでも吾妻殿を奥へ連れてと引立つる、どれに下地の無意氣力(壽門松)

〔無意氣〕頑固で思ひやりのないこと。壽門松のここの文は、醉どれの上に元來意地腐りで、容赦もなく力任せの意。

むかしこよみ 萬年暦昔暦新暦、當年未の初暦(大經師)

〔昔暦〕宣明暦をいふのである。宣明暦は貞觀三年より貞享元年まで久しい間行はれてゐた唐暦である。この暦法は一年を三百六十五日二四六となすが故に、八百餘年も經過すれば大分違つてくるので、貞享元年に至つて改暦の聲熾に起つて、明の大統暦を採用することになつた。然しこの大統暦も暫くの間で廢止となり、貞享元年十一月の末頃から保井春海の作つた貞享暦を用ゐることになつた。ここに昔暦といつたのは、おさん・茂兵衛の姦通事件が天和三年八九月の出來事であるからである。また新暦の語を用ゐたのは、この作の上演が新暦を用ゐてゐる時であるからである。(序云、この姦通事件を近松が本文中に、「貞享元年甲子の十一月朔日來る丑の初暦」と書いたのは、時日を間違へた筆の誤と見ねばならぬ。若し近松が貞享元年甲子の出來事と思込んでゐたものとすれば、昔暦は大統暦をさすものと見るか、或は單に暦の名を重ねた文飾と見ねばならぬ)。

***むかはぎ** 鏃細き鹿子斑(かのこまだら)、御行膝の料なるべし(會稽山)

〔行膝〕向脛巾の義。昔時騎馬に用ゐたもので、獸皮で作り、腰に纏うて袴の前面を垂れ掩ふもの。

むかひおに 煙草賣の源七はまだ見えぬか、氣さく者の通り者、今にも來たらお姫樣まじくらに迎鬼して遊ぶまいか(嫗山姥)

〔迎鬼〕「むかへぼ」ともいひ、鬼事の遊戯を云ふ。一人鬼となりて衆童を追ひ、その捕へられた者が次回の鬼となる。物類稱呼・卷五に、「鬼わたし。江戸にて鬼わたしと云、京にてつかまへぼと云、大阪にてむかへぼといふ、東國及出雲邊又肥の長崎にて鬼ごとと云」。

むぎあき 晩かあすかの里も賑ふ麥秋の、麥搗歌の鳴揃へ(持統天皇)

〔麥秋〕舊暦四月をいふ。禮記・月令篇に、「孟夏之月……靡草死麥秋至」とありて、註に「秋は百穀成熟の期、これ時に於ては夏なりと雖も、麥に於ては卽ち秋なり、故に麥秋といふ」。下學集・時節門に、「麥秋四月」。

***むくつけし** 足には髭のむくつけき、馬の足かと疑はる(虎が暦) あのむくつけな野暮てんめにそもや一夜も添はれうか(兼好)

「むくつけし」「むつかし」などと同じ緣の語である。氣味の惡(わる)い意にいふ。源氏物語・若紫の卷に、「我君はいとむくつけういかにするならんとふるはれ給へど」。同・浮舟の卷に、「あなむくつけや、こばた山はいとおそろしかなる山ぞかし」。

むくらんぢ むくらんぢの直垂・波に千鳥の大口(千載集)

「むくらんぢ」(木蘭地)の轉訛。その條を見よ。

***むくろじ** 比翼の羽子板むくろじも、研き入りては色に成る(壽門松)

〔無患子〕喬木で、葉は羽狀複葉をなし、實は黑色で固く圓い。これを羽子につけなどする。無患子の黑き實も研き入りては艷が出るやうに、禿も頭剛れては太夫の艷色にもなるとの意。

むくろばら これは寢る間もあら憎くや憎くや憎くやと、むくろ腹むくむくおきに(用明天皇)

むくむく腹立つこと。むかつぱら。

***むげ** お藥までも下されし志をむげになす(卯月潤色) 向後房とは通(つう)路せぬ、今まで心をむげにした(重井筒) あの月天子の照覽あり、利生は無下にはよもなるまい(大經師) むげない言分けして下んす(淀鯉) むげなうせくでは無けれども(重井筒) 人に心を盡させ、むげない心が一つの疵(宵庚申)

〔無下〕疎略。「無下ない」の「ない」は、「あらけない」「はしたない」などの「ない」と同じもので、意を強める語助。他を疎略にして一向また一途なるをいふ。情ない。

***むげん** 地獄の火焔に鞴かけ、無間の底の鐵床にのせられ(永朔日) 大紅蓮の水を汲み、無間の薪を樵り運ぶ(釋迦) 佐夜の中山無間の鐘撞當てた禍福長者(博多) 君に逢ふ夜は天の戸の、あくるを恨み語らひし、今はむげんの釜の蓋、あくるを待つに甲斐も無く(井筒) 娑婆で手馴れし玉がわざ、無間の釜で茶をわかし(大經師)

〔無間〕梵語・阿鼻 Avici. の譯語。八大地獄中の第八なる最重苦處であつて、この獄に墮ちた者は呵責苦痛を受けること間斷なきを以ての故にこの名がある。「無間の鐘」は、遠州小夜中山觀音寺にあつた「さよの中山」を見よ。俗說に、古來この鐘を撞くときは現世で長者となれども、未來は無間地獄に墮ちると云ふ。